

八代將軍

吉宗

上

ジエームス三木

八代將軍

吉宗

上

ナムス三木



1994年12月15日 第1刷発行

〈検印廃止〉

著 者 ジェームス三木

発 行 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町41-1 郵便番号150

電話番号03-3464-7311

振替 00110-1-49701

印刷・製本 図書印刷株式会社

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに表示してあります。

図〈日本複写権センター委託出版物〉

本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、
著作権侵害となります。

©1994 James Miki

Printed in Japan

ISBN4-14-005200-7 C0093

大將軍

吉宗

上

目次

御三家 5

母の肖像 23

お犬さま 41

腕白ざかり 59

殿様の子 78

江戸の迷子 97

三つ巴 117

父の背中 137

草いちご

156

殿中刃傷

175

御落胤

193

恋ごころ

212

赤穂浪士

232

紀州の悲劇

251

喪章の城

270

花嫁教育

289

はだか大名

308

題字 仲代達矢

装幀 乾 英彦

協力 N H K

御三家

紀州に比べて江戸の春は足が遅い。若いころから壮健で、病氣らしい病氣をしたことのない徳川光貞^{みつきた}ではあるが、還暦ともなれば朝の寒氣が骨身にしみる。

「気分はどうじゃ」

光貞はかたわらに端座する嫡男^{ちやくなん}の綱教^{つなけり}を見やった。祝い酒の二日酔いを氣遣ったのである。「大事^{だいじ}ござりませぬ」

綱教は折り目正しく頭を下げた。やや細身ではあるが、眉根凜々^{りんり}しい面立ちに、直垂^{ひたな}長袴^{ながはか}の礼装がよく似合った。

ここ江戸城の黒書院は、柱が漆の黒塗りなので黒木書院ともいう。將軍の謁見^{えつけん}する上段が十八畳、下段が十八畳、襖^{ふすま}には狩野探幽^{かうたんゆう}の山水画が描かれている。

光貞父子は、紀州藩邸で執り行われた婚礼の報告と、御礼言上に伺候したのである。二十一歳の綱教を迎えた花嫁は、五代將軍綱吉^{つなよし}のひとり娘で、まだ九歳の鶴姫^{つるひめ}であった。

「まま、お手を上げられよ」

待つことしばし、小柄で貧相な綱吉が、初老の側用人^{わきもちうじん}牧野成貞^{ののちのさだ}を従えて現れた。甲高い声は

上機嫌のしるしである。

光貞は威儀を正して、昨夜の婚礼がいかに華麗で格調高かったかを伝え、鶴姫の可憐さを讃えて、さながら一幅の蒔絵まきゑのようであつたと付け加えた。綱吉はうんうんとうなずき、急に首の筋肉を立てて綱教にいった。

「お鶴はわしの宝じゃ。大切に。風邪をひかせぬようにな」

懇談するうちに尾張藩主光友みつともと、水戸藩主光圀みつくにが到着し、祝いの口上を述べた。光貞は紀州藩主であるから、徳川御三家の御当主勢揃いとなつた。三人は東照大権現家康公を祖父とする従兄弟いとこ同士である。

將軍綱吉はおもむろに坐り直すと、顎を振りながら挨拶した。

「お三方が一堂に会し、親しく御歓談の御様子を、権現様をご覧あそばせば、さぞかしお悦びにござりましょう。また改めて申すまでもなく、不肖綱吉が將軍の座にあるは、ひとえにお三方の御尽力の賜物と心得ます。父家光いふみつになり代わり、兄家綱いふなになり代わり、心より御礼申し上げます」

そこから綱吉の声がくぐもつた。

「それにしてもお歴々が羨ましい。なぜ綱吉は嫡男に恵まれぬのか………徳松とくまつさえ生きていればと、無念の思いに涙がこぼれます」

綱吉には男子がなかつた。側室のお伝おでん（小谷の方）が生んだ世嗣せいし徳松は、二年前に五歳で夭よう

折したのである。

「お嘆き召さるな。上様はまだ四十になるやならずや——」

こともなげにいつてのけたのは、五十八歳の水戸光圀である。これに六十一歳の尾張光友が口を添えた。

「子作りにはタネと畠の組み合わせが肝要と存ずる。若くて丈夫な側室をどんどんおふやしなされ」

それから光貞と綱教は、大奥の御対面所に参上し、御台所の鷹司信子と、鶴姫の生母お伝に挨拶した。

次に訪れた三の丸には、三代將軍家光の側室であつた桂昌院が待つていた。尼僧姿の桂昌院はこのとき六十二歳。綱吉の生母として隠然たる権勢を振るつていた。

「愚痴をこぼすわけではないが、お城は灯が消えたようになろう。いやいや、お鶴とて寂しがるに相違ない。そこで折入つて綱教殿に頼みがある。せめて十日に一度は、お鶴の顔を見せてはくれまいか。里帰りをさせてはくれまいか」

「しかと心得ました」

難しいことではない。江戸城から麴町の紀州藩上屋敷は、目と鼻の先である。

「して婿殿は何どし生まれかの？」

「巳年にござります」

「巳年なら蛇を殺してはならぬ。蛇を殺せばその祟り^{たた}で、決して嫡男を授かりませぬ。そうじやの隆光殿——」

「御意にござります」

次の間に控えていた隆光僧正は、まだ三十代の美男で、桂昌院のお氣に入りである。

「上様も戌年生まれゆえ、犬を殺してはなりませぬぞ」

桂昌院にいわれて、綱吉はこどものように口をとがらせた。

「その儀はいささか解^あしかねます。それが生まれましてこの方、一匹たりとも犬は殺しておりませぬ」

「隆光殿、ありていに申すがよい」

「恐れながら上様は、前世において御殺生をあそばしました」

「前世？」

「徳松君をあえなく失われたのも、前世の祟りにござります」

「何たること——」

光貞はじろりと隆光を見た。信心深い桂昌院と綱吉を利用して、ここまでのし上がった僧に、あまり好感を持てなかった。

「されど御懸念御無用、祟りを除く手だてもござります。何とぞ生類を憐れむお心をお持ちなされませ。犬猫の類は申すに及ばず、およそこの世に生を受けたるものを、ことごとく憐れむ

お心にござります」

隆光は長いまつげを、もっともらしくしばたいた。

「その気高いお心を、あまねく天下にお広めあそばしませ。武士といわず町人といわず、すべての民が生類憐れみの心を持てば、上様の願いは必ず御仏に通じます。すこやかなる御世嗣を得るは必^{ひじょう}定——」

綱吉の目が泳いだ。桂昌院が水晶の数珠をまさぐった。

「上様、ゆめゆめ疑うてはなりませんぞ。隆光殿が七日七晩祈禱の末、ようやく賜ったお告げじゃ」

光貞は腹の中で失笑し、綱吉を憐れに思った。隆光のこの進言が、歴史に残る大悪法の基になるとは、思いもよらぬことであった。

この日、江戸城大広間では、御三家以下在府諸大名総登城の祝宴があり、花嫁の父綱吉は、みずから能衣装をまとして、意気揚々と「葵の上」を舞った。

綱吉と鶴姫が華燭の典を挙げたのは、貞享二年（一六八五）二月二十二日であった。

紀州藩は鶴姫のために、金銀を散りばめた豪華な御守殿を、麴町の上屋敷に新築した。將軍の息女は嫁しても臣下の礼をとらずという慣例があり、そのしるしに荘厳な朱塗りの門まで造営した。いわゆる赤門である。

そればかりではない。御三家の一角を担う紀州家の体面を誇示するため、婚礼には莫大な経費をかけた上、諸大名への引出物にも名物珍品を揃えねばならず、装束代まで加えると、あつというまに十萬兩近いカネがふつとんだのである。

それでも光貞は満足であつた。尾張家や水戸家をさしおいて、ときの將軍の息女を嫡男の正室に迎えたことには、計り知れない重みがある。もし綱吉に男子が生まれなければ、娘婿である綱吉に、六代將軍の座が転がりこむ公算が大きいのだ。

しかも綱吉は異様なほど小柄で、若いころから男色の趣味がある。御台所は三十七歳だし、いまは側室のお伝にも、京から招かれた才媛うものすけ右衛門佐にも、ほとんど近づかないらしい。たぶんこどもは生まれまいと光貞はほくそえんだ。

実をいうと綱吉と鶴姫の婚約のとき、徳松はまだ存命であつた。だからこそ尾張も水戸も反対しなかつたのだ。光貞の野心は徳松の死によつて、急にふくらんだのである。この野心を現実のものにするには、まだひと山もふた山も越えねばなるまい。恐らくは尾張家や水戸家が、難色を示すだろう。

「うっかり隠居はできぬぞ」

光貞は日当たりのいい広縁で、耳かきを使いながらつぶやいた。十三万坪という途方もない広さの紀州藩赤坂中屋敷は、桜が満開である。そばでうつらうつらしていた御簾ごれんちゆう中の照子てるこが目を開けた。簾中とは御三家や家格の高い大名の奥方の尊称である。

照子は伏見宮貞清親王の息女で、光貞には四十年も連れ添っているが、ついに子を生むことはなかった。

「綱教はの、どこといって欠点はないが、おっとりしすぎている。これにたくましさを加えて、誰が見ても將軍にふさわしい人物に仕立てねばならぬ」

光貞は艶のいい頬をふくらませ、てのひらの耳くそを、ふっと吹いた。御簾中はまた目を閉じて、うつらうつらしている。

徳川家康は十一人の男子を得たが、最後に残ったのはわずか四人であった。家康は三男秀忠に將軍の座を譲り、九男義直よしのぶに尾張六十二万石を、十男頼宣よりのぶに駿河、遠江ととおみ、東三河の五十万石を、十一男頼房よりふさに常陸二十八万石を与えた。これが御三家の発祥とされている。

後に頼宣は、秀忠の懇望によって紀州に移封となり、伊勢の一部を足して五十五万五千石を与えられた。この頼宣の嫡男が、二代藩主光貞である。

また秀忠は家康の遺産分配のとき、尾張と紀伊に三十万両を与えたが、水戸には十万両であった。こうした経過を見れば、御三家といえども筆頭が尾張、二番手が紀伊、三番手が水戸という序列は明らかである。

一説によれば、家康の決めた御三家は、將軍家、尾張家、紀伊家であり、後に誇り高い三代將軍家光が、將軍家を格上げして、水戸家を御三家に入れたともいう。

それはともかく、群雄割拠の戦国時代に、家康が見た覇者の姿は不安定であった。信長の天下は一代かぎり、秀吉の天下は二代かぎりである。まさか徳川の天下が、三百年もつづくとは思わなかっただろう。用意周到の家康は、こう遺言したらしい。

「もし將軍家滅亡のみぎりには、尾張家もしくは紀伊家より將軍を立て、水戸はこれを補佐すべし」

だが家康の心配した戦乱は起こらず、將軍家の血筋は、秀忠、家光、家綱と、順調に継承された。家綱には子がなく、弟の綱重も早く世を去ったが、そのまた弟の綱吉が、家綱の養子となつて、めでたく五代將軍の座についたのである。

ところが何の因果か、その綱吉にも徳松の死後、嫡男ができない。將軍家は滅亡こそしなかったが、断絶の危機に瀕している。このまま本家の血筋が絶えれば、分家の尾張もしくは紀伊から將軍を立てるしかないのだ。

尾張家にも立派な嫡男綱誠つななりがいるが、綱吉から見れば人情として、娘婿の綱教に家督を譲りたいに違いない。これは光貞のもくろみであつた。

五月、光貞は参勤交代で帰国した。將軍家と紀州家が、婚を通じてより親密になったことで、国元の雰囲気はいやが上にも盛り上がつていた。

虎伏山とらふしにそびえ立つ和歌山城は、関ヶ原の合戦以来、浅野幸長の居城であつたが、元和五年

に入国した徳川頼宣によって、大がかりな改造が行われた。

戦国時代のしっぽをひきずる初代頼宣は、紀州藩の気風として武を奨励し、高名な武芸者をどんどん召し抱えた。剣術は柳生宗矩の流れを汲む新陰流の木村友重、柔術は関口流の開祖関口柔心、弓術は日置流の吉見経武といった按配である。

その頼宣が能の名手であり、茶の湯にも造詣が深かった。西の丸御殿の内堀を引き入れて作った紅葉溪庭園は、江戸時代初期を代表する屈指の名園である。

決して剛直一本槍ではなく、風雅なたしなみを心得、もののあわれを知る名君頼宣の姿を彷彿とさせる。

二代藩主光貞も、同じように武芸と学問を奨励し、遊芸にも理解を示した。能や茶の湯はむしろのこと、美術工芸に親しみ、狩野流の山水画をよく描いた。

光貞の別邸として造営された西浜御殿は、後に養翠園と名付けられ、今もその面影を残している。紀ノ川の河畔に建てられた岩出御殿は、臨春閣ともいわれ、今は横浜の三溪園に移されている。

精力絶倫の光貞は、側室たちに三男四女を生ませたが、長女なな姫は早世、一条関白兼輝に嫁いだ次女光姫もすでに死去、次男次郎吉も十三歳で病没した。

残る四人のうち、米沢藩主上杉綱憲の正室となった三女栄姫と、嫡男綱教は江戸住まいなので、このとき和歌山城にいたのは、十一歳の四女育姫と、六歳の三男長七だけであった。

帰国して数日たった午後、光貞は表書院で政務日誌に目を通していた。思った通り藩の財政は危機に瀕している。

そこへ城代家老の三浦為隆が、譜代の老臣加納政直を連れてきた。両者とも何やらわけありの面持ちである。

このとき紀州藩の筆頭重臣は、まだ十代の安藤直名で、田辺城主三万八千石。次席格が江戸藩邸を取り仕切る水野重上で、新宮城主三万五千石。この両家はいずれも幕府の付家老安藤帯刀直次、水野対馬守重仲を祖とする名門である。

三番手が和歌山城の留守を預かる三浦為隆で一万五千石。ほかに光貞の実弟松平頼純がいて、紀州藩の分家伊予西条藩三万石を預かり、本藩からの二万石を併せて五万石だが、これはまあ別格とすべきだろう。光貞がもっとも信頼するのは、働きざかりの水野重上と三浦為隆であった。

為隆は時候の挨拶をすませると、すぐに用件を切りだした。昨年（貞享元年）十月二十二日、お紋という湯殿番の女が、光貞の子を生んだというのである。

「男の子か——」

「御意にござります」

光貞は啞然とした。当時の常として奥向きの女は、殿様の所有物に等しい。身の回りの世話をする侍女に手をつけるのは、日常茶飯事である。だが六十に手の届いた光貞が、身分の卑し